

資料シリーズ第2号発刊にあたって

このシリーズの第2号として、新入生に対する姜在彦教授の講演を載せていただける運びとなりましたことを喜ばしく思います。1987年4月のオリエンテーションで「学問と人権について」—在日韓国・朝鮮人問題を中心として、話されたものです。この原稿は、朝鮮文化研究会の学生の皆さんの労によりテープ起しがなされ、それに基づいて姜先生が朱筆を入れ、とくに後半部分を加筆充実されたものを使用しました。図表も添えられて内容と照らし合わせることができます。この号発刊にご協力された皆さんに感謝します。

なおこの種の資料シリーズは第1号発刊以前に、1972年6月17日発行に始まるシリーズが、文献集をも含めて3号ほど出されています。それから数えれば、今回は第5号に概当しますが、新シリーズとして第2号と呼ぶことを許していただき、このシリーズを継続して行くための証拠としたいと思います。

本学の解放教育を推進していくなかで、とくに記すべきことは、1987年度に本学で最初の「人権週間」の行事を開催したことです。部落問題に関しては、北口末広講師に（12月8日）、在日朝鮮人問題については、徐正禹講師に（12月9日）、それぞれ講演していただき、人権パネル展も開かれました。これを契機として花園大学のすべての構成員が改めて人権尊重の認識を深めると共に、あらゆる差別をなくするために、お互いに努力していくことを確認しました。

このシリーズ第2号がわたしたちの共通の取り組みの助けとなれば幸いです。

1988年3月10日

解放教育研究委員長

小林 圓 照

学 問 と 人 権

— 在日韓国・朝鮮人問題を中心に —

講師 姜 在 彦 教授

1 はじめに

「今、文学部長の小林先生から紹介された者ですが、最初に諸君達の入学を心から御祝いします。

私の名前は姜 ^{カン} 在彦 ^{ジェオン} と言うのですが、漢字は同じ漢字ですが、朝鮮語の読み方と日本語の読み方と二つあるわけです。本学では幸い朝鮮語で読んでもらっているのですが、私の友人達の中には、私を着 ^{さか} にして悪口を言うのが居て、姜 ^{カン} 在彦 ^{ジェオン} というそうとう悪いやつが居る。他方では、姜 ^{キョウ} 在彦 ^{ザイゲン} というそうとう悪いやつが居ると、こういうふう

に話しになる場合が、時々あるらしくて、どうも話しているうちに姜 ^{カン} 在彦 ^{ジェオン} も姜 ^{キョウ} 在彦 ^{ザイゲン} も同じ人の事を言っているのではないかという事になって、時々電話がかかってきて、君は姜 ^{カン} 在彦 ^{ジェオン} か姜 ^{キョウ} 在彦 ^{ザイゲン} か、どっちが本当かと問い質してくる場合があるんです。しかし、漢字は同じで、読み方が違うという程度のものであります。

ところが、学年末になると試験が有りますね。試験の答

案に、一年間講義をした先生の名前を書く事になっているのですが、非常に残念な事に時々、二、三人、一年間講義を受けた先生の名前を知らない人があって、その時になって先生の名前は何でしたか？と、聞いて来る場合があるんですね。せめてこの大学に居る間に、一年間講義を受けた先生の名前は覚えていた方が良いのではないかと思うのです。

実は、今日オリエンテーションで、何か講演をするようにいわれた時、何回も辞退しました。何か他のもっと、偉い先生にお願いした方が良いのではないかと、再三言ってきました。何故、辞退したのかと言いますと、もう諸君は気付いていると思いますが、私は風采^{ふうさい}があがらないばかりでなく、日本に40年間居ながら、日本語の発音が良くないのですね、朝鮮人丸出しで発音するわけだ。おそらく諸君の中の少なくない学生たちは、あまり在日朝鮮人を好きでない人もおるのではないかと思う。そういう人たちに、在日朝鮮人丸出しの下手な、発音の悪い日本語で話す事は、大学のイメージダウンになるのではないか、そういう事を心配したわけです。どうしたわけか、私は舌が短いのか、日本語の発音が良くない。特に日本語の濁音がどうして

も解らない。濁音が有ると無いのが解らない。長いのと短いのも解らない。この前、どこかの百貨店に行って、本の間にはさむ付箋を買いに行った。「ふうせん」は無いか？と言ったら、それは地下の食品街にあるはずだと言うのですね。考えてみたら、食品街には子供達のための風船が置いてあるでしょう。あれの事を言っているのですね。おかしいと思って、実はしかたなく、紙を出して筆談をしたわけだ。本の間にはさむ付箋だと初めて解って、あれは風船でなくて付箋だという、発音が初めて解りました。私はここでも講義をやる時、そういう事に自信が無いものだから学生達に聞きながら、教えてもらいながらやっています。

まず第一に、日本人にそう好かれてもいない朝鮮人である私が、しかも下手な日本語で語ることは、この大学のためにイメージダウンになるんじゃないかと心配しました。第二には、こういう講演というものは、やっぱり一発勝負と申しますか、短時間のうちに、諸君たちになんか響くものがなくちゃいかなのですね。講義というものは、一年間ズルズルズルっと継続するものだから何とかなるんだけれども、短かい時間のうちに何かひとつ響くものがなくちゃ

いけない。そういうことで私は全然自信がないわけですよ。日本のことわざには「落語家を殺すには刃はいらない、ため息で足りる」という言葉があるらしいんですが、おそらく、そういう風に皆さんを引付ける自信がないもんですから辞退しました。しかし再三言われたもんだから、醜態を諸君たちにこのようにさらすようになったわけです。

以上は余談ですが、さて本論にはいると頭が痛いですね。今日の演題は「学問と人権」という大変むずかしい問題だからです。ここで「学問」とは何か、或いは「人権」とは何かというように抽象的なことを並べてみても仕方がないので、もっと具体的な、そして身近かな問題をとりあげて話したいと思います。

平たくいえば人間というのは、性別とか、人種とか、国籍とかにかかわりなく、この地球上のどこで生れようと、またどこで暮していようと働く意思をもった人は、働いて生きていく権利があると思います。ところがある社会、ある国で、もし男と女という性差によって働いて生きることによって制約をうける、或いは人種が違い、民族が違うから働く職場から排除される、したがって生存する権利をおびやかされるとするならば、その社会、或いはその国に問題が

あるといわざるをえない。

学問とはそういう問題点がどこにあるのかを考え、それを正し、改善して一步でも二歩でもより良き社会、より明るい社会に近づくための方法や見通しを考えていくことだと思います。諸君たちはそれぞれ本学の仏教学科だの、国文学科だの、史学科だの、社会福祉学科だのと専攻コースを選択していると思うが、それらすべての学問は、とどのつまり、この一点に集約されるものと思います。

日本の社会にも同じ日本人でありながら、部落差別とか、女性差別とか、身障者差別とか、いろいろな問題をかかえていて、それを派生させている問題点を考え、それをどのようにして正していけばよいのか、真剣に論議され、また実践されていることは、すでに諸君たちは知っていることと思う。

ところが以上のべたことは日本人内部の問題ですが、日本の社会もしだいに国際化するにしたがって在日外国人問題というのが生じてきていますし、恐らく日本社会が今後ますます国際化の度合が深まるにつれて重要な問題となっていくことでしょう。

例えば諸君たちはすでに、新聞やテレビなどをつうじて

知っていることだと思うが、外国人にたいする指紋押捺の問題があります。また日本政府でも従来の方針を変えて、労働市場の一定の分野には外国人労働者を受けいれなければならないのではないか、という論議もあります。これらはいずれも在日外国人問題です。

ところが、これについてのちにもっとくわしく話すつもりですが、在日外国人といってもその9割以上は在日韓国・朝鮮人です。その数はほぼ68万名になりますが、しかもそのうちの35万名は大阪を中心とした近畿地方に集中しています。恐らく諸君たちが無事この大学を卒業して教員、あるいは地方公務員になったばあいはなおさらのこと、いかなる職場についてもこういう問題にぶつかるはずです。

もちろん私は在日朝鮮人の一人です。そこで「学問と人権」という大きな問題を、在日韓国・朝鮮人問題にしぼって話してみたいと思う。

日本人のなかには、どうして日本に韓国・朝鮮人が居るのか、朝鮮は貧しく、日本は豊かな国だから、よい生活をするために日本に移住してきたんだろうと、単純に考えている人も多いようです。だからその韓国・朝鮮人が指紋押捺に反対すると、日本の法がいやなら朝鮮に帰れ、という

声があがります。

また日本生れの朝鮮人の子女たちが、小・中・高校では諸君たちと肩を並べて勉強をし、人権は国境を超えた普遍的なものとか、地球人はすべて家族とか教えられたりしたと思います。そのように教えられた朝鮮人の若い諸君たちが、社会に出た途端、学校では想像もしていなかった排他と差別の現実につぶさる。或いは日本の友人のばあいは何か犯罪を犯したときしか指紋をとられないのに、どうしてわれわれにはすべての人にそれを強制するのか、そういう疑問をもつようになる。

つまり学校教育で教えられたことと、日本社会の現実との間に余りにも大きなへだたりがある。いったいどちらが真実なのか、たちまち頭が混乱してしまって、一部の者たちはそういう絶望に耐えきれなくて非行に走ってしまう由々しい問題もあります。こういう問題は、まさしく日本社会がかかえている大きな問題の一つです。

Ⅱ 在日朝鮮人の形成

(1) 一般外国人と異なる歴史的背景

ここまでは前段ですけれども、これから在日朝鮮人が日本にいるようになった歴史的経過とその現状、そして今後、在日朝鮮人の生き方としてどういう選択があるのか、そういうことについて自分なりの考え方をお話をしようと思います。

まず第一には、わかりきったことのようにですけど、在日朝鮮人がどのようにして形成されたか、あるいは日本に住むようになったかということです。これは非常に常識的なことなだけで、やはり在日朝鮮人の問題を考える場合には、これをきちっと踏まえなくてはいけない最も基本的なことだと思います。これをきちっと踏まえて在日朝鮮人、あるいは韓国人問題を考えれば、いろんな問題が比較的スムーズに理解できる道もあり得るのではないかと、こう思うんです。

それで最初に言えることは、今、日本にはだいたい140ヶ国の方がおりますけれども、在日朝鮮人というのはアメリカ人とかフランス人とか他の人が日本で住むようになっ

た経過とは違った特殊な歴史的背景を持っているということですね。だから、アメリカ人やフランス人など一般外国人と同じようには扱えない特殊な歴史的背景があるということ、これをまず第一に踏まえなくてはいけないのではないかと思うんです。

それは何か、一言で言うならばそこへ書きましたように西暦1910年というのは明治43年ですが、その明治43年8月に朝鮮が日本に併合されて以後昭和20年まで、ちょうど満35年間、朝鮮は日本の植民地だったわけです。この植民地時代に、つまり日本と朝鮮との関係が支配と被支配、日本が支配し朝鮮が支配されるという、そういう時代に形成されたものが在日朝鮮人であるということですね。

「併合」前—
留学生として

それをちょっと具体的に言えば、朝鮮が日本に併合されるその前の年の1909年、これは明治42年ですけれども、

この時は在日朝鮮人は790名でした。当時の在朝日本人、朝鮮にいる日本人は12万6000名を越えています。日本にいた朝鮮人は790名であるのに対して、朝鮮にいた日本人が12万名を越えているんですね。それがだんだん在日朝鮮人が増えていき、1915年には3989名、そして1930年になると

いうと29万8091名、約30万ですね。1938年、これは昭和13年ですか、昭和13年になるというと79万9000名、約80万、こういうふうに飛躍的に増えていきます。

併合前の1909年の790名というのは、これは併合後の朝鮮人とは内容がちがいますね。790名というのは、ほとんど留学生です。なぜそうなるかという、明治時代には外国人移住制限法がありましてね。特に行政官庁は朝鮮人、中国人が労働者として日本に移住することを禁止した勅令を出していました。だから、朝鮮人や中国人が日本に来て労働者になることは不可能だったわけです。

みなさんもご存知のように、日本には日露戦争後にアジア諸国からたくさんの留学生が来ました。朝鮮、中国、フィリピン、ベトナム、インドからも来ましたでしょう。その頃アジア人というのは、日露戦争を白色人種と黄色人種の戦争とみたんですね。そして、黄色人種である日本人が白色人種であるロシアに勝ったということに非常に共感を覚えました。

そして、自分たちがヨーロッパの先進文明を学ぶ場合も、ヨーロッパまで留学する必要はないのではないか。身近にある日本から学ぶというわけで、さかんに日本に留学生が

来ました。中国の指導者もほとんど日本留学生でしょう。朝鮮の場合も、そうなんです。ただ日本に留学した人たちのほとんど90%以上が反日思想を持って帰ったんですね。日本人に対して「同じ黄色人種であり、同じ東洋人である。しかも漢字を書けばわかる相手だ。」そういう共感、熱い気持ちを持って来てみたら、日本人はアジア人に対してとても高慢で、冷ややかで、一方ではヨーロッパ人に対しては非常にあこがれ、姿勢が低くてガッカリしてしまいました。朝鮮からの日本留学生もほとんど90%以上が朝鮮で反日化し、独立運動に身を投げ出すというような状況になってしまう。

今、中曽根総理大臣が10万名のアジア留学生を受け入れると言っているわけですから、お金はあるんですね。お金は十分あると思いますけれども、受け入れるにあたってはその留学生たちが反日思想家にならないように受け入れる側の考え方を必要がある。せっかくお金を使って反日思想家を育てるとなると、これは馬鹿馬鹿しい話でしょう。そういうことが日露戦争直後の時期と同じく、今もほとんど変わらない問題としてあるのではないかと思います。ともあれ、留学生については、そういうことがあります。

「併合」後 —
植民地労働力として

ところで、朝鮮人の主要な部分
が植民地労働力として日本の労働
市場の中にくいこんでくるのがい

つかと言いますと、第一次世界大戦ですね。第一次世界大戦というのは、1914年に起きまして18年に終わるんです。それまでは併合されて日本の領土になっても、朝鮮人はなかなか日本に来たがらなかった。日本に来るよりは、朝鮮にたいする日本の植民地支配に不満をもった人たちが、主として北の方に向かって行ったんです。今の中国東北地方。昔の満州には170万人おりますね。それにシベリア一帯と中央アジア・コーカサスを中心として約40万おります。

北へ北へ行くのが一般的流れであって、日本には来なかったんですが、ちょうど第一次世界大戦の時、日本は非常に景気がよかったですね。連合国側から参戦したんですけども、被害は受けなかったでしょう、日本は。主戦場がヨーロッパですから。だから、連合国側のロシアとかイギリスとかフランスとかから日本にさかんにいろいろな軍需品の注文がきまして、笑いが止まらなかったんです。

本当のところ、日本は日露戦争の時無理して外国から借金して戦争したもんですから、たいへん困っていたんです。

債務国であったわけですね。この第一次世界大戦の時は債権国に変わる。この戦争で一番もうかるのは、日本とアメリカですね。アメリカも連合国から参戦したんだけど、戦争被害を受けてないんですから。それで世界の金融の中心がロンドンのロンバート・ストリートからアメリカ、ニューヨークのウォール・ストリートに代わる。そういう転機があった。非常にもうけた。もうけていくその中で、労働力不足に悩んだわけです。いくら物を作っても追いつかないわけですから。

そこで、初期の段階では日本側から朝鮮に行って、いわゆる募集をするわけですね。1920年第一次世界大戦が終わった時は在日朝鮮人の人口は3万。しかし、そのあと急激に増えていく状況になってきます。

このように在日朝鮮人が日本に渡ってくる原因としては二つの側面がありまして、一つは日本の資本主義が朝鮮の労働力を必要としたということです。こういう一面があるわけです。それは、たとえば日本に、特に第一次大戦後には日本で深刻な不況がありまして失業問題が起こるわけです。失業問題が起こっても、なおかつ、日本の資本主義は朝鮮人労働力を必要としました。

最近、女性解放運動でよく同一労働、男女同一賃金ということを言うでしょう。なんで同じ労働をやっているのに、男と女に差をつけるかということで女性解放運動がありますが、この同一労働差別賃金というのは男女間だけにあるのではなく、民族間にもあるわけです。だから、以前の植民地時代には支配民族である日本人労働者と、支配される被支配民族である朝鮮人労働者との間には、画然たる賃金の差をつけました。同じ労働に対して。だから、日本に失業問題があろうとなかろうと、日本の資本家は低賃金労働者としての朝鮮人を必要としたのです。

さらに、朝鮮人というのは日本労働者が嫌う労働分野、長時間で過激で、不潔でというような日本人労働者が嫌う労働分野でも働かせることができるということで日本の中に失業問題があろうとなかろうと低賃金で、しかも劣悪な労働条件に耐える労働力として朝鮮人労働者を必要としたということですね。

これが、だいたい第一次大戦から1938年、昭和13年までの日本側の原因とみていいでしょう。

農村の過剰人口

もう一つは、どれだけ日本の資本家がそれを必要としても、朝鮮に過剰人

口というか、それを送り出すような条件がなければいけないわけですが、これが何かというと、特に朝鮮の農村経済、植民地支配下における朝鮮の農村の事情が原因となります。

在日朝鮮人が日本に来る前に朝鮮で何をしていたかということ調査した資料がありますが、だいたい8割ないし9割は朝鮮では農民であった人たちです。これが日本では何をするか、労働者になるわけです。つまり、在日朝鮮人というものは朝鮮での農業者、農民が日本では労働者となる、その労働者も日本の労働市場の最底辺層と言えます。日本の労働市場の底辺層のさらにその下の最底辺層を形成するものとして在日朝鮮人があったわけで、そういう人々を押し出す原因として朝鮮における農村の事情があったわけですね。

それは何かというと、よく言われると
土地調査事業

ころの土地調査事業ですね。これはちょうど併合の年から始めまして8年間かけて、朝鮮の土地を津々浦々、隅から隅まで測量して調査する大事業をやったんですね。これを説明しようとしたらいろいろありますけれども、一言で言うなら、これが作り出した大きな問題というのは朝鮮の農村に地主と小作農という関係を作り出し

たことだと思います。

この調査事業によって朝鮮の土地の半分、50.4%を、これは全農家の3.3%、9万戸ぐらいですが、わずかこれだけの地主が全土地面積の半分以上を所有することになりました。地主は自分で農業をしないでしょう。地主は所有するだけであって、その所有した土地を少しずつ分けて小作農に小作させる、こうなりますね。小作料が日本の小作料をずっと上回るもので、ほぼ7割、収穫の7割なのです。地主はただ所有権を持っているだけで、じっと座っていても土地の収穫の7割は自然にあがってくる。そういう関係から農村で小作農はもちろん、零細な自作農さえも食えない層が増える。どこか転業先、行くところがあったら行きたい人たちが作られてくる。こういうことなんですね。これが最底辺労働者を日本に押し出す原因になっている。

あの金達寿さんが書いた『わがアリランの歌』というのを読んだ方がおられるでしょうか。あれを読んでも、彼は慶尚南道の馬山の近くの出身ですが、その故郷に私も一緒に行って、彼の前の住まいであったところに行ってみましたが、あのあたりでは小作料は9割近くもとられたことがあったというんですね。なんでそんなめっちゃくちゃな小

作料を取り得るかということ、工業が発展していたら土地から離れてすぐ労働者になる。仕事をする場があったら離れられるわけですね。ところが残念なことに、植民地であった朝鮮の工業というのは農村からあふれ出る人々を吸収できる程の発展がなかったわけです。

そうすると、どうしても農民は土地にしがみつかざるを得ない。しがみつぐためには地主のあらゆる無理難題を全部きいていかなくちゃいけない。気嫌とらなくちゃいけない。特に朝鮮の場合、小作人というのは非常に不安定なんです。地主がしゃくにさわったら、いつでも小作権を取り上げることができる。こういう状況でしたから、だから地主の言うことは一方的に聞かざるを得ない。だから、実際は7割だけど、場合によっては9割近くも小作料を収めるという状況がうまれるわけですね。

ですから、植民地下における朝鮮の状況は一時的な貧困ではなくて、恒久的な貧困が朝鮮の農村をおおうという状況としてあるわけです。

土幕民と火田民
そういう中で、農村ではどうしても借金がかさむ。農業をしても飢えてしまう。どうにも仕方がないから夜逃げ同然で都市に集中す

る場合、都市貧民層を形成する。これを朝鮮では、土幕民^{トマツクミン}と言いますね。

それともう一つは、山奥に入って山に火を入れて焼き畑農業をやる火田民^{フアツヨンミン}ですね。火を入れてから燃えかすの灰が出てくるでしょう。そしたら燃えた山の斜面で焼き畑農業をやるわけです。肥料も何もやらずに、そこにトウモロコシとかなんかを植えてね。それで地力が減ったら、また奥に入って火を入れる。これはもちろん法律違反ですから捕ったらぶち込まれる。ぶち込まれようと何をされようと、そんなことは構ってられない。これが朝鮮の山を荒した原因の一つになるわけです。

海外流民　　このように国内ではどうしても生活できな

いものですから、その一部が海外へ流れていくわけです。海外へ流れるのには大きな二つの流れがありまして、一つは北方の方です。つまり、昔の言い方で満州、シベリア、もう一つは南、日本ですね。だいたい地理的な状況からして南部朝鮮の人たちは日本に来る。だから、今でも在日朝鮮人で一番大きな比率を占めるのが慶尚南道、次が慶尚北道、三番目が済州島、四番目が全羅南道、みんな南部朝鮮です。北部朝鮮の人たちは北の方へ北の方へと

流れていく。

植民地時代の流民現象を表わすものとして、我々は「男^{ナン}負女戴^{フヨデ}」という言葉をよく使います。つまり、朝鮮の男の人はよく物を運ぶ時、背負子^{チゲ}というものを使い、女は頭に載せたわけです。つまり、家の財産というのはそれしかないわけですから、男が自分の家財道具を背中に背負子で背負い、女は頭に載せてあてどもなく流れていく姿、しかも「扶老携幼^{フロキョウ}」、つまり、年寄りを助け子どもたちを携えて、おんぶする場合もあれば引っ張って、泣いたらぶん殴ったりして流れていく。

そういう状況というのがあるわけですね。いろいろ統計なんかたくさんありまして、それを見ると日本に来る場合には渡航費用とかが要り、若干の生活がよくなくては来れなかったようです。そこで、自作農層が多いですね。北へ北へと流れていく人たちは、それこそ本当に無一文の人ですね。背負子をかつぎ、頭に載せた物の他は何もない。そして乞食をしながら流れていくという姿がだいたい一般の戦前の農村の状況です。

だから朝鮮人というのは、さっき話したように1909年にわずか790名だったものが併合以後、朝鮮が日本の植民地

になって後昭和13年、1938年には急速に80万人にも達したという事実の中には、まず、植民地労働力として低賃金に耐える劣悪な労働条件を強制できるという労働力を日本の資本主義が必要としたということが一つと、二つ目は、在日朝鮮人は朝鮮の農民が日本で労働者になるということですから、そういうものとして農民を押し出すような朝鮮の社会的背景、それは主として農村の状況というものがあったということです。

これが、だいたい土地調査事業以後にでき上がった朝鮮の農村状況であったということですね。

そういう二つの面があって、このように在日朝鮮人が急速に増えていくわけです。これを一つの段階と見たら、朝鮮人を日本に引っ張ってきた、引っ張ってきたとよく言われますが、この段階では自由渡航です。自由渡航ではありますが、さっき話したように朝鮮人を日本の労働市場に押し出した植民地支配という社会的背景があったわけです。

(2) 戦争中の強制連行

ところが、それからのち1939年（昭和14年）から終戦の年、1945年（昭和20年）8月までの状況はちょっと違うわ

けです。

強制連行の
始まり

これは自然に朝鮮人が日本に来ることを待っているわけにはいかない。朝鮮で食えなくなって日本に流れてくるのを座って待っているわけにはいかない。朝鮮に出かけて行って引っ張ってこなくちゃどうにもならないということ、つまり、言うところの強制連行なんです。

なぜそうなるかと言うと、みなさんもご存知だと思うのですが、昭和12年7月7日に日中戦争が起こりました。そして、だんだん戦線が拡大していきました。戦線が拡大していくに従って、日本の国内の工場、鉱山、農村から最も優れた中堅労働者が軍隊として引っこぬかれて行ったわけですね。

そういうことで、日本国内での労働力の不足の問題が非常に深刻化しました。その労働力の不足を何によって補うかという問題になったわけです。これを補うために、国民を総動員したわけでしょう。学生たちは今、勉強やる時期じゃない、勤労働員とかね、捕虜を使えとかいろいろありますけども、その日本国内の労働力不足を補う最も主力軍として朝鮮人があったわけです。

しかも、重要なことは危険な地下労働分野に捕虜を使うにしても捕虜の数は限られているから、最も日本人が嫌う危険な地下労働分野での労働力の不足を補う上で、決定的な意味をもつのが朝鮮人だったわけです。朝鮮人は見込まれたわけです。人的資源として見込まれてしまった。

この人的資源の問題は、非常に深刻な問題でした。日本は小さいでしょう。あのころ日本は人口6000万と言ったかな、それが中国に戦線を拡げて行ったもんだから大変なことになった。「あー、これはたいへんだ。どこで人的資源を得ようか」と、研究し始めるわけです。そこで台湾も考えたのですが、台湾は人数が少ないばかりでなくて、日中戦争では使えない。なぜなら、同じ中国人だから。樺太なんかには、ほとんどいない。日本の版図内で最も豊かな人的資源は日本のほかでは朝鮮人しかないんですよ。ちょっと見込まれすぎたんですよ。

危険な分野での
労働力として

それで戦線に彼らを引っ張り出すことも研究していかなければならないが、とりあえず日本本土内で不足した労働力を補うために、しかも、日本人学生たちを配置できない、勤労働員できない危険な分野の労働力として引っ張ってく

るということで強制連行が始まってくる。

強制連行された人びとの就業先は、だいたい地下労働が多いんです。1939年から強制連行がありまして、どこに配置するかというと、まず炭鉱があります。その次は金属山。強制連行された労働力の59%が炭鉱と金属山に入って行ったんです。つまり、約60%が地下労働に入っていたんです。

その次は何かと言うと、土建関係、その次は工場関係の諸産業、特に地下労働で非常に危険が伴う、しかも日本人が非常に嫌う地下労働に60%が集中する。技術が進歩し、保安施設が非常に発展した今でも炭鉱事故が起こるでしょう。あの時は、そんな保安設備はあるわけがない。ほとんどが突貫工事でしょう。目の前で仲間が死んでいくわけですよ。そこに、きのうまで農村でのんびり農業をしていた人を捕まえてきて働かす。逃げないように収容することが必要になる。

僕は今まで炭鉱に入ったことはありませんが、ちょっとこわいですね。朝鮮でのんびり農業をやっていた人たちを捕まえてきて、爆発事故が起こる炭鉱に入れ、仕事をさせるためには相当の強制措置をとらなければならないという

わけですね。

1年に20万もの
朝鮮人が

このようにして、1939年には96万人
余りだったものが、44年には193万60
00でしょう。終戦の年の5月には推定
で210万名。これで考えてみると5年間に100万名が増え
ている。5年間に100万増えたから、1年間に20万も増え
たこととなります。農村から引っ張って着のみ着のままの
形で、風呂敷一つ持って列を作って歩かされるみじめな朝
鮮人の光景、戦時中の日本の国内には、いくらでもあった
光景です。

このように在日朝鮮人というのは、一般的な在日外国人
とはちがった歴史的背景といきさつを持って形成された人
間であるということになります。

おのずから在日朝鮮人をいかに見るかということは、戦
前における日本のアジア大陸に対する侵略と支配をいかに
見るかということにつながるのです。朝鮮人の強制連行で
あれ、中国人に対する南京虐殺であれ、当然で、よくやっ
たことだというのなら話は別です。ひょっとしたらそのよ
うな見方もあるかも知れませんが、しかし、明治以降日本
が朝鮮を併合し、さらに満州事変を起こし、日中戦争を起

こし、大太平洋戦争に至る一連の戦争の過程そういうものを反省して、我々は新しいアジアと平和の関係を結んでいかなければいけないという立場に立つ場合は、見方を変えなくてはいけない。

だから、在日朝鮮人の見方というのは、植民地支配に対するものの見方、考え方に深くかかわる問題であると、そのように思います。そういう意味で、在日朝鮮人の問題を考える場合、きっちりと踏まえなくてはならない基本点として、他の外国人一般と違う特殊性がそこにあるんだということなのです。

Ⅲ 戦後日本の韓国・朝鮮人

(1) 朝鮮民族の解放

戦後の帰国と
残留

つぎの問題として、終戦後、すなわち解放後の現状です。さっきもちょっとお話ししたんですが、終戦の5月の推定で210万、これは日本本土だけです。たとえば、南洋諸島とか東南アジアなどいろんなところへ引っ張って行かれた軍属などの人は別なんです。それに軍人、軍属が別に36万おったわけです。

終戦当時、210万。翌年の3月に日本政府の厚生省が初めて外国人登録をしたんですが、その時登録した人が64万、だから終戦からわずか6か月間に140万が帰った。しかも、冬の玄海灘というのは波が荒いことで有名でしょう。中には玄海灘で船もろとも全員海のもくずになってしまった事実が、終戦後20数年もすぎて判明した例もあります。

あの波高い冬の玄海灘を越えて、別に日本の政府が「ごろうさんでした」と船を手配してくれるわけじゃない。3人、4人がグループを作って、小さい漁船を買ったり借りたり、そういうような形でなだれうって帰った。

冷めてくる

帰国熱

1946年3月現在の64万というのは、全部日本に居すわるつもりはなくて、そのうち帰国希望者が51万でした。ともあれ、その当時64万の中でも51万が帰る予定であって、GHQの命令で1946年4月から計画輸送を始めたんですが、そのうちにだんだん帰国熱が冷えてくるわけですね。

これには二つの理由があります。一つは、さっき話したように在日朝鮮人はほとんど南部の出身ですね。

ところが朝鮮人にとって日本の敗戦というのは、自分たちの解放、独立であり、独立の喜びに燃えあがったわけです。あんまり喜びすぎたもんだから、敗戦を悲しむ日本人から反発を受けたのです。我々は悲しんでる。君たちは大極旗を振り回してなんだ、生意気野郎と。日本人の感情を逆なでするようなことをやったもんですから、今も怨んでいる人が多いですよ。

そういうふうには沸き返ったのに、いざふたを開けてみたら祖国は独立ではなくて、南北分断がある。北はソ連、南はアメリカ、しかも南はアメリカ軍政が布かれた。つまり、在日朝鮮人の大多数の出身地である南部朝鮮に日本の支配にかわってアメリカの支配が入り込んでただけというこ

とで、絶望感があった。だから、そういうアメリカ軍政に反対する南朝鮮の闘いが激しく起こったわけであって、第二次世界大戦後の世界のゲリラ闘争の最も激しいところが、アジアでは南朝鮮、ヨーロッパではギリシャです。ベトナムはそのあとで激しいところとなりました。

日本にいた朝鮮人が帰るべき慶尚南道、慶尚北道、済州島が最も激しいゲリラ闘争地域になってしまった。

二つ目は、日本政府は朝鮮人が帰国する場合、一人当たり1,000円以上持ち出しを禁止したんです。そのほかの全ての財産は家であれ何であれ、日本政府に預けて帰れと、こうなったんです。預ける際、日韓国交正常化によって解決するんだと、こういうことになっているんですが、当時それはあてにならない話でしょう。日韓国交正常化というのは1965年ですから、終戦から何年後ですか、20年も経っているんですよ。つまり、帰る時に1,000円持って帰ったところで、郷里に土地もあり家もあり家族もある人はともかく、在日年数が長ければ長い程そういう人は故郷に生活基盤がないでしょう。だから、1,000円のお金を持ってそのまま帰るわけにいかない。

そういう二つの側面がありまして、帰国熱がだんだん冷

めて、そして今日の在日朝鮮人の原形となったわけです。若干の移動はあります。北朝鮮への帰国も約10万近くあります。日本籍を取った、いわゆる帰化も12万ぐらいありますね。だから、本当は今日の在日朝鮮人の数字は北朝鮮への帰国と、帰化した人を合わせたら90万近くになるわけです。

(2) 現在の状況

在日外国人の8.5割が
在日韓国・朝鮮人

それで今の状況はどうなっているかと言うと、実はもっと新しい資料がありますけど、本質的にはあんまり変わらないから、昭和55年、今は62年ですから7年前の数ですが、在日外国人総数は77万名、その中で韓国・朝鮮人が66万5400名、これは総数の85.5%、中国人が5万500名、全体の6.5%となっている。

在日外国人総数の77万6000名というのは、国籍の上で見ると140ヶ国にばらついています。その中で韓国・朝鮮人と中国人、その中には台湾人が含まれるわけですが、併せてこれだけで92%、残りの8%だけが約140ヶ国にばらついているわけです。その中で一番多いのはアメリカ人です。

アメリカ人が約2万人余り。あとは桁ちがいに少ない。ある国は一人とか二人ぐらいしかいないところもある。

だから、一般に在日外国人問題と言っていますが、在日外国人という場合の実質的な内容は何か、これは在日韓国・朝鮮人問題であるわけです。もし、在日外国人の中でアメリカ人やフランス人が80%を占めていたら、日本政府は今のような外国人対策はとりませんでしょう。もっと紳士的にやるはずです。

在日外国人対策と言いながら、実際は常にターゲットというか目標を朝鮮人に置いている。中国人はおとなしく、黙っていますからね。そこに目標を決めているところに日本政府の在日外国人対策の基本があるわけです。ところが、外国人の92%は、一体どういう人なのか。これは、かつての日清戦争後の台湾に対する植民地支配、そして日露戦争後の朝鮮に対する植民地支配の産物としてこれがあるということでしょう。

この問題は先きほどちょっとお話しましたが、これはかつての日本のアジアとのかかわりを、日本がどういうふうにか考えるかという問題と深くかかわっているというふうには言わざるを得ない。日本における外国人の問題というのは

そういうことなのです。だから、朝鮮人や台湾人をとった
らですね、日本に外国人問題はないのと同じことです。在
日外国人総数から92%の朝鮮人や中国人を除いて残りを14
40ヶ国へばらまいてごらんください。何が外国人問題なのか、
そういうふうになっているわけですね。

世代交替の 問題

それで私は在日外国人という場合に実質
的内容は在日朝鮮人であるということと言
ったんですけども、ところが在日朝鮮人、
あるいは韓国人、こういう言い方についても、もっと説明
すべきことがあるのですが時間がないので省きますが、在
日韓国・朝鮮人にとって非常に大きな問題は、戦後すでに
42年になるわけですが、戦後42年になっている中で非常に
大きな、我々が非常に頭が痛い問題があるのです。それは
何かと言うと、世代交替の問題です。

日本人の中にも戦後世代の交替の問題があるでしょう。
戦前世代とか、最近年取った方が、「最近の若い者は、戦争
の悲惨を知ってもらわにゃ困る」とか言って、怒ったり
なんかします。そういうことがありますけども、在日韓国
・朝鮮人の世代交替にはもっと深刻な問題があるんです。
まず第一に、日本生まれの世代は外国人登録証を持ち、

その外国人登録証の国籍欄には朝鮮だ、韓国だと書いてあっても、その朝鮮なるものが何たるか知らない人なのですね。

外国、たとえばアメリカでは、二世はみんなアメリカの市民権を持っているわけです。ヨーロッパでも全部そうですね。ところが在日朝鮮人の場合は、三世、四世も国籍欄には朝鮮・韓国とある。これは日本の状況です。日本は血統主義ですから。このことは、外国人にはいくら説明しても理解できない。私も昨年アメリカへ行ったんですがね、在日朝鮮人が置かれている状況をどう説明しても理解できない。どうして日本生まれが朝鮮人か。これが本当に理解できない。つまり、朝鮮とあらゆるかかわりが消えてしまった在日韓国・朝鮮人があって、しかも、その人たちが増えているということ。一世がだんだん減っていく。

1974年の統計から出生地別で見ると、日本生まれが全体の75.6%、朝鮮生まれが24.1%、その他不明は朝鮮生まれかどうか分からない。これは日本生まれに入れてもいいでしょう。あれから13年ですから、その後日本生まれの世代が10%増えたとみなくちゃいけない。

だから、実際は日本生まれが85%ぐらいでしょう。さら

に、10歳までに親に連れられて日本に来た人は、祖国がどういうものであるかわからないんです。従って、実際には一世の感覚を持っているのは、おそらく10%と見ていいでしょう。だとすると、祖国を知らない世代が90%と見ていいんじゃないでしょうか。

内外人平等でない

日本

ソ連にも中国にも、朝鮮系の人はたくさんいます。中国にも170万人がいるわけですが、彼らは中国人の

朝鮮族というマイノリティです。ソ連でもそうなんです。彼らは、全く平等です。中国にもソ連にも私の知人がおって、いろいろな知的専門分野ではなばなしい活躍をしていますね。

過日、シカゴで朝鮮系の世界各国の学者、ジャーナリストたちが集まった会議がありましたが、アメリカでも教授クラスが1200名おります。待遇に白人との差はあるかと聞いたら、「ある」と言っていました。どのくらい差があるか、大学学長は望めないこと、学部長までは白人と朝鮮人の差は10%の差がある。だから、百人より10%多く努力したら、同じレベルで学部長まではなれる。ただ学長はダメだ。それぐらいの差しかない。つくづく日本ほど、朝鮮人の

知的分野への進出が抑えられている国は世界に類例がないなど感じました。

いろいろ問題が重なる中で最大の問題は、労働権の問題です。基本的人権の中でも、言論、出版、集会、結社の自由は、これはある意味ではぜいたくな自由です。それよりも、まず働く能力があり、働く意欲を持った人に異民族ということだけで職場を与えないこと。これがまず基本中の基本の問題です。

大学で教員免許状をとり、教員の資格があっても、在日朝鮮人子女たちにはそれが通用しない。こんな社会はめずらしいですね。日本人であれ、外国人であれ、日本政府が認めた教員資格は日本の中で通用しなくちゃいけない。民族別、性別で差をつけること、これが差別というものです。

よく日本では、日本の子どもたちは日本人が教えなくちゃいけない、日本語や日本文学は日本人が教えなくちゃいけないと言います。朝鮮人でも日本の国文科を出た優秀な学生がおり、日本人以上に日本の文学をよく知っている人がおります。どうして彼らは日本文学を教えちゃいのか。その理屈でいくと、英語は全部イギリス人かアメリカ人を連れてきて教えるようにしなくちゃいけないことにな

る。こんなことは世界に通用しない、非常に日本的な考え方と言わざるを得ない。

こういうふうに制約される状況があって、日本の大学が認めた資格を民族と国籍が違うということで社会が認めないという現実があるんですね。在日朝鮮人というのは穀つぶしではないんですよ。それぞれ自分の能力を持って、日本の社会作りに寄与しようとしている。朝鮮人が作った商品と日本人が作った商品に何か違いがありますか。在日朝鮮人大学生は4000名位でしょうか、そのうち一年毎の卒業生は1000名ぐらいでしょう。日本のような経済大国が、たかが1000名の大学生を雇用したからと言って失業者が出るという何かがあるんでしょうか。

Ⅳ ま と め

最後ですからもう締めくくらなければならないのですが、私は在日外国人と言う場合に、それを一般的、抽象的に把握するんじゃなくて内容的に把握しなくちゃいけないということを行ったんですが、最近、非常にいろんな論争とかで出されてきている新しい方向として、こんなことがあります。

以前は、日本国民がいて、日本の中に
定住外国人と 在日外国人がいてという前提で、いわば
一般外国人 二元的に論議をしてきたのですが、最近
非常に注目すべきは在日外国人を二つに分けて考えるということ
ことです。

すなわち、定住外国人と一般外国人の二つに分けなくちゃいけない。今、指紋押捺とか登録証の常時携帯で問題になっているのは、一般外国人ではないんですよ。

一般外国人はどういう人かと言うと、僕は法律のことはよく知りませんが、観光目的で来た場合、90日以内の場合は登録しなくていいんですね。だから、登録に載るのは90日以上日本におる人が登録されるわけですが、一般外国

人というのは一時的在住者で、たとえば留学、商社マンの商用、報道関係、外交官、芸能関係がかなり多いんだそうで、最近では芸能関係で、入って何か変な商売をやって追い出される人もおるようですが、そういうようなのがだいたい一般外国人です。

それに対して、定住外国人は戦前からいる人、及びその子孫は区別すべきである。この定住外国人というのは、日本人と同じく、納税を含めた義務を果しているのです。ちゃんと税金を払っています。つまり、ちゃんと義務を果しているのだから義務に見合った権利は保障されるべきだということなのです。

たとえば、いわゆる公権力の行使とか国家意志の決定、警察官とか外交官とか、あるいは国会議員など、つまり日本の主権にかかわる公権力の行使や国家意志の形成、そういう分野を除いた職種、たとえば公務員の中でも社会保障関係とか技術関係とか医療関係とか、たくさんのポジションがあると思うんですが、そういう仕事については差をつけるべきではないと思うんです。

共存できる
社会を

お互いに常識的な線でやっていけないものか。それはどういうことかと言うと、日本の社会で在日朝鮮人が生きるためには、在日朝鮮人は自分のかたちを日本人に似せてしか生きられない状況、日本の中で最大の外国人である在日朝鮮人が自分の姿を日本人に似せてしか、日本人化した状況でしか生きられない状況、これは不自然な状況ではないかということです。

在日朝鮮人でも日本生まれの世代は、追い出そうとしても彼らは行くところがないんです。韓国へ行っても、彼らは日本人と同じです。僕だって、朝鮮人まる出しでしょう。だけど、韓国へ行ったらダメですわ。道を歩けば必ず日本語で尋ねられる、ガックリきました。やっぱり、半日本人だなと、僕はそう思ってしまったんですね。

そういう状況ですからね、彼らは生きる場はここしかないから、朝鮮人は自分を隠して生きようとせざるを得ない。隠すことは精神的に非常によくありません、特に若い時に。朝鮮人であるがままに日本の社会の中で政治分野のようなある限定された部分を除いた面で、労働する能力があり、意志がある者には働く場を開く、すなわち、生きていく権

利を、生存権を認めて共存していく社会を求めること、これは決して無理な要求ではないのではないか。それがまた、在日朝鮮人が持っているところの才能を日本の社会作りに寄与させることになるのです。

そういうふうには朝鮮人であり続けながら日本の中で生きていけるように、もっと風通しのいい、そういう社会を作れないものかというのが私たちの念願であり、決して無理なものではないと、こう思うのです。

以上で、一応終わります。

資料①

在日朝鮮人人口動態

年度	在日朝鮮人 名	增加人口 (前年比) 名	在朝日本人 名
1909	790		126,168
.....			
1915	3,989		
1916	5,638	1,649	
1917	14,501	8,863	
1918	22,262	7,761	336,872
1919	28,272	6,010	
1920	30,175	1,903	
1921	35,876	5,693	
1922	59,865	23,989	
1923	80,617	20,752	
1924	120,238	39,621	
1925	133,710	13,472	
1926	148,503	14,793	442,326
1927	175,911	27,408	
1928	243,328	67,417	
1929	276,031	32,703	
1930	298,091	22,060	501,867
1931	318,212	20,121	
1932	390,543	72,331	
1933	466,217	75,674	
1934	537,576	71,359	561,384
1935	625,678	88,102	
1936	690,501	64,823	
1937	735,689	45,188	
1938	799,865	64,176	
1939	961,591	161,726	650,104
1940	1,190,444	228,853	
1941	1,469,230	278,786	
1942	1,625,054	155,824	752,823
1943	1,882,456	257,402	
1944	1,936,843	54,387	
1945	2,100,000 (5月推定)		

〔資料〕 1909年—『日本帝国年鑑』

1915～44年—内務省管保局統計

在朝日本人(軍隊除外)—總督府『朝鮮事情』(昭和17年版)

資料②

表題 朝鮮農村の小作農化傾向

(単位%)

年次	区分	自作農	自作兼 小作農	小作農
1928~32年平均		19.4	31.4	50.2
1933~37年平均		19.2	25.5	55.2
1939年		19.0	25.3	55.7

出所：鈴木武編〔朝鮮の経済〕から作成

資料③

表題 強制連行された朝鮮人労働者数

年次	合計	炭坑	金属山	土建業	工場を含む 諸産業
1939	38,700	24,279	5,042	3,379	……
1940	54,944	35,431	8,069	9,898	1,546
1941	53,492	32,099	8,988	9,540	2,865
1942	112,007	74,576	9,483	14,848	13,100
1943	122,237	65,208	13,660	28,280	15,089
1944	280,304	85,953	30,507	33,382	130,462
1945*	6,000	1,000	……	2,000	3,000
1939~45	667,684	318,546	75,749	107,327	116,062

(注) *印は1945年4月より6月迄推計

出所：厚生省労働局

(1) 在日外国人のなかの韓国・朝鮮人

資料④

表1 長期在留外国人数

昭55.7.1日現在

国籍	資格等	登録総数 昭55.6末 推定	協定 永住許可	法126-2-6	4-1-16-2	4-1-16-4
韓国・朝鮮		(638,806) 6,654,000	(342,366) 349,964	(149,076) 137,282	(121,217) 139,219	(2) 3
中国		(46,944) 50,500		(8,192) 4,739	(3,702) 2,641	(1) 0
無国籍		(5,009) 3,000		(2,162) 647	(557) 252	(1) 0
その他 (今回は未調査)		(58,335) 58,500		(1,092)	(31)	(0)
計		(749,094) 776,000	(342,366) 349,964	(160,522) 142,668	(125,507) 142,112	(4) 3

韓国・朝鮮人 85.5%
中国人 (台湾を含む) 6.5%
92.0%

- (注) 1. ()内は昭和49年在留外国人統計の数である。
2. 注126-2-6欄に記載した昭和49年の数は、在留資格不詳のものを含む。
3. 韓国・朝鮮、中国、無国籍以外の国籍のものは未調査である。
(法務省入国管理局編「出入国管理の回顧と展望」(昭和55年度版))

資料⑤

表(12)在日朝鮮人の世代構成

(1974年現在)

出生地別	日本生まれ	483,185名 (75.6%)	} 638,806名 (100%)
	朝鮮生まれ	154,054名 (24.1%)	
	その他	1,567名 (0.3%)	
年齢階層別	0～19歳	247,537名 (38.7%)	} 638,806名 (100%)
	20～39歳	232,153名 (36.4%)	
	40歳以上	158,407名 (24.8%)	
	不詳	709名 (0.1%)	

(「出入国管理」昭和50年度版より)

資料⑥

表題 朝鮮人・韓国人の出身地

韓国・朝鮮 (1974年4月1日現在)

出身地	人員	比率%
慶尚南道	246,638	38.6
〃北道	158,683	24.8
済州道	101,378	15.9
全羅南道	61,423	9.6
〃北道	12,064	1.9
忠清南道	13,053	2.0
〃北道	11,459	0.8
京畿道	5,410	0.9
ソウル	9,462	1.5
江原道	4,971	0.8
平南	1,867	0.3
平壤	217	—
平北	1,134	0.2
咸南	2,173	0.3
咸北	700	0.1
黄海南	1,284	0.2
黄海南	102	—

(「出入国管理」昭和50年版から)

